

聖書：コリント人への手紙第一 10：14～22

説教題：偶像礼拝を避けなさい

日時：2022年9月11日（朝拝）

パウロは10章前半で、今日の私たちにとってもショッキングなメッセージを語りました。それは新約の教会の先祖である旧約の神の民イスラエルのことです。彼らは今日私たちが受けるバプテスマや聖餐式に相当する恵みをみな受けていました。ところが出エジプトを導かれた彼らの大部分が荒野で滅ぼされました。ですから私たちも洗礼を受けたから、聖餐式を定期的に受けているから、それで自動的に救われるということにはならないということです。洗礼式や聖餐式は神が与えてくださった素晴らしい恵み的手段ですが、それさえ受けていれば救いは確実であるというわけではありません。同じ恵みにあずかったかつての神の民には滅びた者が大勢いるからです。「ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい」とパウロは12節で言いました。自分は大丈夫だと思って自己過信してはならない。自分にも同じことが起こらないよう、自分の歩みについてよくよく注意しなければなりません。9章27節でパウロが述べたように、「失格者にならないように」という正しい緊張感をもった取り組みが必要です。

なぜ荒野で多くの民は滅ぼされたのでしょうか。6節に、それは彼らの貪りのためであると言われていました。神の戒めを心に留めず、それを無視して自分のやりたいように生きたからです。その具体的な中身が7節以降4つ語られましたが、その最初にあげられた中心的な問題が偶像礼拝でした。ですから今日の14節で「私の愛する者たちよ、偶像礼拝を避けなさい」と言われます。「避けなさい」という言葉は「逃げなさい」という意味の言葉です。それを認めたら遠くへ離れなさいということです。興味本位で関わってはならない。反対方向へ急いで走り去れということです。またこれは現在時制で語られていますから、絶えずそうしなさい、継続的にどんな時もそうし続けなさいというニュアンスを持っています。

ではここで避けるようにと言われていた偶像礼拝の中身は、もう少し具体的に言えばどんなことでしょうか。これはあらゆる偶像礼拝に当てはまると言えますが、ここで考えられているのは、これまで見て来た通り偶像に献げた肉を偶像の宮で食べる行為のことです。コリントはギリシャの中心的な町の一つであり、異教社会の町として、

様々な市民的集まりが異教の宮で異教的な祭儀とともに開かれました。そのような宮に行って偶像に献げた肉を食べて良いのかどうかを巡って、コリント教会の中には意見の相違がありました。ある人々はこれを問題ないと考えました。その根拠は偶像の神は実際にはないものであるということでした。世界にはただお一人の神がおられるだけで他の神は存在しない。その実体はない。だから偶像に肉がささげられても、存在しないものがそれを汚すことはできない。この知識を持っていれば問題なく参加できる。むしろこの知識に立って恐れずにどこへでも行き、人々と交わるのが成熟したクリスチャンのしるしだとある人々は主張していました。その一方、ある人々はそれは偶像礼拝の罪を犯すことだと感じていました。なぜ異教の神を拝む生活から救われたのに、また異教の宮へ行って、形だけとはいえ、その神に服するような行為をしなくてはならないのかと。この問題について8章1節から色々なことが言われて来ました。その結論的なことがいよいよ今日の箇所述べられます。

15節でパウロは「私は賢い人たちに話すように話します。私の言うことを判断してください。」と言います。この後にも出て来ますが、パウロはコリント人たちが良く考えて、自らで正しい結論に達することを願っています。パウロに言われたからと言って、理解せず、また納得せず、ただそれに従うことをパウロは求めていません。それはカルトのすることです。思考停止して人の言いなりになるのではなく、自分で良く考え、自分で正しいと確信してその道を行くようにすること、それが大事なことです。パウロはその道を進むようにと勧めています。そして二つの例を通して、このことを良く考えてほしいと言います。

まずその一つ目は聖餐式です。16節に杯とパンが出て来ます。パウロはこれらを飲み、食することは、キリストご自身にあずかることではありませんかと言います。「あずかる」と訳された言葉は、ギリシャ語のコイノーニアという言葉で「交わり」を意味します。つまり私たちは聖餐式のパンと杯にあずかることを通して、キリストご自身と交わるのです。ですからそれは単なる食事ではありません。このことを良く考えれば異教の宮で異教的な祭儀のもとに行われる食事はどうなるでしょう。それも単なる食事とは言えないことになります。それはそこにあるもの、そこで拝まれているものと交わることを意味します。

17節では聖餐式における共同体的側面のこと言われています。今日の多くの教会

では衛生的な課題もあり、すでに切つてあるパン、分割されたパンをそれぞれが受け取るというかたちで聖餐式が行われていますが、本来的には一つのパンから裂いて皆が食べるという方が良いでしょう。それによって私たちが食するパンは一つであること、私たちは一つのパンを食する一つの民として導かれていること、一人一人が主につながっているだけでなく、私たちが主にあつて一つからだに結ばれていることをより体験的に知る者とされます。ですから私たちの信仰は単に主と私という個人主義的な信仰ではありませんし、聖餐式にあずかる時、単に主と自分の関係だけを考えていれば良いのではないのです。主が導き入れてくださっている共同体的祝福を感謝し、この与えられている一つの交わりを尊び、これを深めるように、互いに互いのことを思い、愛し合う関係に生きるようにと導かれるべきです。このことも教会の中に分派が生じ、互いに他者を見下して個人個人を誇る傾向のあつたコリント人たちが良く思い巡らすべきことです。

二つ目にパウロが提示する例は 18 節の「肉によるイスラエル」です。これは旧約時代のイスラエル、ユダヤ人を指す表現と思われる。彼らは旧約の様々な規定にある通り、ささげものをささげる際、神の前でそれを一緒に食べました。パウロはその食事において彼らは祭壇の交わりにあづかったのではないかと言います。つまりこちらにおいても、それは単なる食事とは言えないということになります。その食事は祭壇が象徴する神との交わりを意味し、また神から来る霊的な恵みに実際にあづかりました。それは宗教的に中立の食事ではなく、宗教的意味がセットになっています。そこにおられる神との具体的な交わりが発生しています。

さて、これらのことから何が言えるのでしょうか。パウロは 19 節で言います。「私は何を言おうとしているのでしょうか。偶像に献げた肉に何か意味があるとか、偶像に何か意味があるとか、言おうとしているのでしょうか。」パウロはここでコリント人たちの問いを先取りしています。コリント人たちは先に見た通り、偶像の神は実際にはないものであるとの知識に立っていました。パウロも 8 章 4 節でそのことに同意していました。ところがパウロのここでの話は、それと矛盾したことを言っているように聞こえます。パウロは聖餐式や旧約のささげ物の規定を持ち出して、それは主と交わることを意味したと言っていますが、それを偶像の宮での食事にも当てはめて、まさか偶像の神が実際に存在するとか、その神と交わるというようなことを言っているのか。それは前に言ったことと違うではないかとコリント人から言われることを想定

しています。そういうことではないとパウロは言います。そしてこのことに関する決定的な答えを 20 節で語ります。すなわち、偶像に献げた肉は神にではなく、悪霊に献げられているのだと。確かに聖書によれば神は唯一であって偶像の神はありません。人々が拝む偶像の神は人々が仕立てたものであって、そこに実質的な神はいません。なのになぜ人々はそれらを拝んでいるのでしょうか。それはそのように拝ませる力が背後に働いているからです。その力とは悪霊です。ですから異教的な祭儀が行われる場所へ行き、その儀式に自らを合わせることは、背後にいる悪霊と交わることだとパウロは言うのです。

これは何もパウロの独特な主張ではありません。彼の言葉は申命記 32 章 17 節を下敷きにしています。申命記 32 章 15～17 節：「エシュルンは肥え太ったとき、足で蹴った。あなたは肥え太り、頑丈でつややかになり、自分を造った神を捨て、自分の救いの岩を軽んじた。彼らは異なる神々で主のねたみを引き起こし、忌み嫌うべきもので、主の怒りを燃えさせた。彼らは、神ではない悪霊どもにいけにえを献げた。彼らの知らなかった神々に、近ごろ出て来た新しい神々、先祖が恐れもしなかった神々に。」
「エシュルン」とはイスラエルのことです。これは申命記の言葉ですので、約束の地に入る前の荒野の民を指します。神は彼らに良くしてくださったのに、彼らは神を捨てるようなことをしました。異なる神々を拝み、主のねたみを引き起こし、主の怒りを燃え立たせました。そして 17 節にそれは悪霊どもにいけにえを献げる行為だったと言われています。ですから偶像の神々は実際にはないものであるとの一言をもって、問題を片づけることはできないということです。偶像の神々と関わり、その宗教的儀式に服することは悪霊と交わること、悪霊に服し、悪霊に自らをささげることであるということです。そのことを見て取らなければなりません。

21 節でパウロは「あなたがたは、主の杯を飲みながら、悪霊の杯を飲むことはできません。主の食卓にあずかりながら、悪霊の食卓にあずかることはできません」と言います。ここでも注目されているのは悪霊です。偶像の宮で提供されているのは実質的には悪霊の杯であり、悪霊の食卓です。人は主の食卓にあずかりつつ、悪霊の食卓にあずかることはできないとパウロは言います。これは「誰も二人の主人に仕えることはできない」という聖書の他の箇所で行われているみことばと同じことです。主を主として仕えながら、時に悪霊にも仕えることはできない。それはできない相談であり、相容れないこと、成り立たないことです。

パウロは最後に「それとも、私たちは主のねたみを引き起こすつもりなのですか」と 22 節で言います。先ほど参照した申命記 32 章 16 節にも主のねたみのことが言われていましたし、その後の 21 節でもこう言われています。「彼らは、神でないものでわたしのねたみを引き起こし、彼らの空しいものでわたしの怒りを燃えさせた。」ねたみとは愛の裏返しです。聖書には旧約聖書にも新約聖書にも、神はねたむほどご自身の民を愛している、慕っているという言葉があります。これは結婚関係を考えると分かりやすいと思います。もし伴侶が他の異性に心を向け、惹かれるようになったら、もう片方の伴侶はどう思うでしょう。激しくねたむのが自然の反応です。何とも思わないなら本当に愛しているかどうか疑わしいということになります。愛するからこそ、他のものに心を奪われているのを見てねたむのです。神はそのように私たちをねたむほどに愛しておられると言います。驚くべきメッセージです。それほどに見つめられている私たちです。しかしそのことは私たちが他のものに心を向け続けるなら、ただでは済まされないことも意味します。神は激しい怒りをもってさばきを下します。そのような目にあいたいのですかとパウロは問います。あるいは私たちは主よりも強い者なのですかと問います。コリント人たちは自分たちは強いと自負していました。しかしパウロはまさか主よりも強いと言うつもりですか？と問います。果たして主と張り合って勝てるのでしょうか？主より強くて主を丸め込むことができると考えているのでしょうか？と。もちろんそんなことはあり得ません。ですから主のねたみを引き起こして主のさばきを刈り取ることがないように、自らの振る舞いを良く検討し、修正して行かなければなりません。

今日の箇所から私たちは異教的な儀式の背後には悪霊がいることを覚えさせられます。私たちも異教社会にあり、人々との交わりや付き合いにおいて異教的な祭儀が行われる場所に招かれることがあるかと思えます。その場合、どうすべきかについて今日の御言葉は行くべき道をはっきり示してくれています。私たちは神々は実際にはないものなのだから、形だけ人々に合わせても何の問題もない。心で拝まなければ何の害も自分には及ばないと考えてはなりません。それは一言で言って悪霊と交わることです。主の民であり、他の主の民とも一つに結ばれている私が、行って悪霊と交わることです。それは単なる意味のない食事とか意味のない動作とは言えません。それは悪霊主催のパーティーに出かけて悪霊に服することです。ですからパウロは最初の 14 節で「避けなさい！」と言いました。これくらいは良いだろうなどと言って近づか

ず、急いで離れよ、絶えずそうせよ！とパウロは言っています。

そして心に留めたいことは、私たちは二人の主人に仕えることはできないということです。主に仕えつつ悪霊にも仕えるということはできません。私たちの主はお一人です。主はねたむほど私たちを愛し、慕っていてくださいます。私たちはその主への感謝を、主にのみ忠実に従う歩みにおいて告白する者でありたいと思います。主が喜ばない道に足を踏み入れ、悪霊に自らをささげるようなことをして、ねたむ主がさばきのために立ち上がるという行動を引き起こす者となりませんように。心の中だけでなく外側の生活においても主のみを主とし、主との交わりこそを求め、それゆえ主が避けなさいと言われる行いを避け、主が喜びをもって与えてくださる祝福の道こそを
行く主の民の幸いな歩みへ導かれて行きたいと思います。